

令和4年度第1回
総合教育会議 会議録

開催日 令和4年5月23日

南あわじ市教育委員会
南あわじ市・洲本市小中学校組合教育委員会

令和4年度第1回南あわじ市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和4年5月23日(月)

午前10時00分 開会

午後 0時09分 閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

- (1) 教職員の働き方改革について
- (2) 学ぶ楽しさ支援センターについて
- (3) 社会教育の課題及び方向性について

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

<南あわじ市>

市長	守本 憲 弘	教育長	浅井 伸 行
教育長職務代理者	近藤 幸 常	教育委員	敷田 久美子
教育委員	青木 京	教育委員	山本 真也

<学校組合>

管理者	守本 憲 弘 (兼務)	教育長	浅井 伸 行 (兼務)
教育長職務代理者	狩野 時 夫	教育委員	近藤 幸 常 (兼務)
教育委員	山本 真也 (兼務)		

欠席構成員

<学校組合>

教育委員 本條 滋 人

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長	勝見 哲	ふるさと創生課長	秦 伸 行
福祉課長	金山 知 史	子育てゆめるん課長	中嶋 宏 昭
教育次長	仲山 和 史	教育次長補兼学校教育課長	上原 泉
教育総務課長	秀 充 浩	社会教育課長	阿萬野 真司
体育青少年課長	山家 光 泰		
学ぶ楽しさ支援センター開設準備職員	大本 晋 也		
教育総務課係長	佐々木 友美	教育総務課主任	野上 典 子

1 開 会 午前10時00分

【秀教育総務課長】 定刻になりましたので、ただいまより、令和4年度第1回南あわじ市総合教育会議を開催いたします。

(秀教育総務課長より、出席者の紹介)

【秀教育総務課長】 本日の会議を傍聴される方は、南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願い申し上げます。

2 市長あいさつ

【秀教育総務課長】 開会にあたりまして主催者であります、守本市長よりご挨拶申し上げます。

【守本市長】 本日はご多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。

今回からは新たに青木委員にご参加いただきます。このメンバーで1年間どうぞよろしく願いいたします。

最近の教育関係について市長部局の視点から若干申し上げます。

3月21日にまん延防止措置が解除になりましたが、最近、政府の方で外ではマスクを外してもいいんじゃないかという話も出ております。学校では一足早く屋外でマスクを外す対応を行っておりますが、引き続き感染防止対策に気をつけながらできるだけ子ども達にのびのびと学校生活を送っていただきたいと思っています。

I C T関係では、一昨年に全児童生徒に1台ずつタブレットが配付されています。その後の様子を見ていますと、自分たちでいろいろ調べて動画にするなどの活用が進んでいます。今後の教育の方向性がこのようなところに示されているように思います。

コロナ禍で止まっておりました小中学校の大規模改修については、今年度は本格的に進めていきます。実施する側からすると工事が集中しているということもありますが、学校側には特に問題もありませんので進めていきたいと思っています。

本日は、社会教育関連が議題となっておりますが、かなり動きがありまして、松帆銅鐸が奈良から帰ってまいります。また、特別展として「龍の棲みか展」を開催しておりまして、ゴールデンウィーク中のイベントとして、私も子どもたちと一緒に龍の絵を描きました。また、コロナ禍で中止となっていました竹本駒之助師匠の南あわじ市公演も実施される予定です。

令和3年3月23日に南あわじ市の地域創生にかかる包括連携協定を、淡路三原高

等学校、淡路景観園芸学校、国立淡路青少年交流の家、南あわじ市の4者で締結しております。4者で何を主題にするのかというところではありますが、私の印象からすると、できるだけ高校生に地域創生の体験をしてもらうことで、地域の中に取り込んでいくというところに意味があるのではないかと考えています。令和4年度は環境、農業、水産業という南あわじ市の特徴を活用して高校生にもぜひ地方創生を探求していただければと考えております。

「学ぶ楽しさ日本一」を掲げて数年になりますが、この取り組みについて市民の方に実際にどういう取り組みをしているのかということが、まだ十分に理解されていないのではないかと思います。「学ぶ楽しさ日本一」に限らず、市の政策を市民の方に理解していただくのはなかなか難しいのですが、できるだけホームページや広報紙等で周知に努めていきたいと思っております。6月の市広報で、ふれあい市長室という市長のコラムがありますが、ここで「学ぶ楽しさ日本一」についてご紹介する予定です。ぜひ委員のみなさまからもご意見などいただけたらと考えています。

先日、内閣府の審議官であり、特にICTを使った教育について推進をされている方の講演を聞いてまいりました。教育はこれまでボリュームゾーンに光をあててきましたが、今後は個々の進路に合わせて教育を進めていく、これが一人一台タブレットにつながっているというお話でした。南あわじ市では、沼島小中一貫校・小規模特認校を進めています。今年度から沼島中学校に柔道部が新しくできて、福良から大きな体の中学生と小学生2人が一緒にバスに乗って登校しているようですが、結構いい雰囲気になっているのかなと感じています。

さて、その講演の際に、私から疑問を呈したのは、個別の教育に光を当て、ICTの活用によりネットでつながることで、学年という概念自体が薄れ、学校規模や子ども的人数は重要でなくなる一方、文科省が学校の営繕の基準を厳格に定めていることにより、その基準に合う大きな校舎を作らなければならないという矛盾が生じてきています。学校の規模を建築という観点から決めてしまうことで、学校を統合せざるを得ないのはおかしいのではないかと質問しますと、そのとおりのご回答でした。現状、文科省の営繕部局が取り残されているため、次の教育計画の中では改善に向けて議論していくということもおっしゃっていました。このような動向から、学校の施設のあり方は今後変わらざるを得ないと思っています。今後、沼島のチャレンジを含めて、学校のあり方を検証していく必要があると思っております。

さて、本日の議題は「教職員の働き方改革について」「学ぶ楽しさ支援センターについて」「社会教育の課題及び方向性について」ですので、皆様方の活発なご意見をお願いいたします。

3 議 事

【秀教育総務課長】 本日の協議事項に入ります。

協議事項につきましては事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願いいたします。

【守本市長】 それでは次第に従いまして協議事項に移ります。

まず協議事項の1つ目、「教職員の働き方改革について」を、事務局より説明をお願いします。

(1) 教職員の働き方改革について

【上原次長補兼学校教育課長】 資料にあります平均超過勤務時間の表は、小中学校別と役職別に月平均で掲載したものです。大きく減少したのは令和2年度です。令和2年度は新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言で6月まで学校が臨時休業となりました。学校再開後はソーシャルディスタンスをとった授業形態や行事の見直しが行われ、部活動の時間短縮と大会の自粛が中学校の超過勤務の改善につながったと考えられます。令和3年度はGIGAスクール構想、統合型校務支援システムの導入が重なり、導入や活用に向けての研修が多くなったことで教職員の負担が大きくなりました。それにもかかわらず、超過勤務時間数が大幅に増えることがなかったのは、令和2年度の経験を生かして教育効果を高める行事を見直したこと、校務支援システムにより成績処理が容易になったこと、部活動の時間短縮を引き続き実施したことによるものと考えられます。部活動指導員につきましては、現在5人配置しています。

成果と課題としましては、令和2年度からスクール・サポート・スタッフを沼島小中学校以外の学校で1日に3時間ずつ配置しています。感染症防止のための消毒作業だけでなく、教職員でなくてもできる仕事として配付物の印刷、仕分け、丸付け等をしていただいています。

また、令和3年度から、超過勤務時間が規定より多い教職員に対して、校長面談や産業医面談をとおり、改善策への取り組みや教育活動の質の向上と焦点化を図れるように指導しています。

現在の取り組みとしては、業務改善推進委員会で5つの重点目標を決め、業務改善を図っています。数年前からノー残業デー、ノー部活デーが定着しています。また、参考1として文科省資料「公立学校の教育職員の業務量の適切な管理その他教育職員のサービスを監督する教育委員会が教育職員の健康及び福祉の確保を図るために講ずべき措置に関する指針（概要）」を添付しておりますが、ここで時間外在校等時間の上限として、1か月45時間以内、1年間360時間以内と定められております。これをもとに、南あわじ市立学校教職員の長時間労働者面接指導実施規程で、1か月あたり

45時間を超える時間外勤務を3か月以上連続して行った者、1か月あたり80時間を超える時間外勤務を行った者を面接指導の対象となる職員としております。令和3年度の対象者は、のべ84名、うち、産業医面談を受けた者がのべ15名ということになります。

今後の取組予定としましては、大きく2つあります。

1つめは、給食費の公会計化と学校徴収金の事務移管のためのシステム導入です。参考2として、「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）（概要）」を添付しておりますが、ここに、学校徴収金の徴収・管理については、基本的には学校以外が担うべき業務と書かれております。これまで各学校で担っていた給食費会計及び学校徴収金業務を教育委員会で担うためのシステム導入準備に取り掛かっております。

2つめとして、全教職員に対してストレスチェックを年2回実施する予定となっております。

今後も、教職員がゆとりのある生活を送れる環境を整えることで、質の高い教育と児童生徒と向き合える時間の確保に努めてまいります。

以上でご説明とさせていただきます。

【守本市長】 それでは、順に委員の皆様のご意見をおうかがいしたいと思います。

【近藤委員】 様々な取組の説明を聞いておりますと、私たちが現役の頃からの思いが徐々に現実化しつつあると感じました。また、こういうことができたらいいの、と思っていたことが文科省から提言されていることがわかりました。県教委、市教委も順次進めていくことになり、いい方向に進んでいると感じますが、スピードアップも大事だと思っております。

働き方改革の広報についてですが、ノー残業デー、ノー部活デーの取組については、私の住んでいる地域でもご存じの方もおられ、肯定的なご意見が多いように思います。教員OBとしては非常にありがたいことだと感じました。引き続き、いろいろな機会をとらえて広報をお願いしたいと思います。学校も社会と共に、社会も学校と共に変わっていったらいいのではないかと考えております。

参考1の教職員の長時間勤務に関する資料の中で、「在校等時間」という言葉を初めて聞きました。勤務時間を適切に管理しようという中で、勤務時間の管理にICTやタイムカードの活用も考えられるようですが、新しい発想で提言されていると思いますので期待したいと思います。

【數田委員】 現場から離れてずいぶん経ちますが、私が現職の時に勤務時間の記録が

実施されるようになりました。私が気になるのは、正確な勤務時間が記録されているかということで、現場であまり真剣に受け止められていないということがないか懸念されます。しかし、結果として勤務時間が減っていることはいい方向だと思います。

お聞きしたいのですが、コロナ禍で出張が減っていると思いますが、そのことによるメリットデメリットについてはどうでしょうか。実際にお互いに顔を合わせて協議することによって新しい情報を得られる部分もあるのでは思っています。反対に、出張が減ったことによる経費負担の軽減もあると思いますが。

あと、どの学校でも一緒だと思いますが、教頭の超過勤務がなかなか減らない状況がありますが、改革のいい方向性がないかと考えます。

また、一見、超過勤務が減っているようでも、帰宅してから教材研究等に時間をかけている教職員もいらっしゃると思いますので、そのあたりをどう対応していくかという課題もあると思います。

部活動指導員が5名配置されているということですが、人数が少ないと感じましたがなにか理由はあるのでしょうか。

【上原次長補兼学校教育課長】 部活動指導員につきましては、今年度は7名分の予算を置いています。現在は5名分の配置となっています。水泳が始まる頃にはもう1名配置したいと思っています。実際には人材の確保に苦慮しているところです。

出張が減ったことによる影響ですが、現在、3密にならないための方策として、ハイブリッド型の会議等が増えております。オンライン会議では、画面上で全員の顔を見ることができ、チャットで書き込むこともできるため、オンラインに慣れてくることでコミュニケーションも割合取りやすくなっております。一方、数田委員もおっしゃったように、直接会うことによって、雑談などの中から生まれるものもあると感じています。

【青木委員】 説明をお聞きして、保護者としては、知らなかったことのオンパレードでした。近藤委員がおっしゃっていましたが、こうなったらいいのに、と思いながら子どもたちへ接して下さっていたのだなということがわかりました。また、保護者側から見ても、先生方が大変そうだとすることは日々感じているので、もっと楽になっていただきたいし、楽になって先生方の笑顔が増えることで、子どもたちももっと学校へ行きやすくなり楽しくなることで、余計な時間を使わなくていいのかなと思います。

私が子どもを2人育てていて思うことは、部活動のあり方自体を変えていく必要があるのではないかということです。強くなりたい子たちや勝ちたい子たちと、ただ運動がしたい子たち、楽しみたい子たちがひとつの部活動に同居している状態なので、部としてどういう指導者が本当にいいのかが見えてこないところがあります。保護者

同士でも意見がそろっておらず、あんな先生連れて来られても困るとか、もっとこんな先生だったらいいのにとか、あんな先生だったらやめさせようかなという発言が実際に起こっており、それに巻き込まれる子どももかわいそうだと思うので、部活自体のあり方を変えることにより、先生の超過勤務も改善されないだろうか、と考えながら資料を見ておりました。

また、少し論点がずれるかもしれませんが、校則やルールが多すぎてその対応のために時間を取られているのではないかと思います。本当にこのルールが必要なのかということについて子どもたちと議論できたらいいのにと、保護者として約9年間考えておりました。ルールを守らせることやその対応に時間をかけてくれる先生もいますが、なぜそのルールが必要なかわからないまま時間が過ぎ、保護者の不満は募り、その不満を家庭で子どもが聞き、子どもが学校で言い始めるということが起きています。時間がかかるかもしれませんが、ルールの必要性について議論することが大切ではないかと思います。

参考2の資料にあるように、「業務を大幅に削減」とありますが、学校のどのような業務が削減されたのかということはリスト化されているのでしょうか。

【上原次長補兼学校教育課長】 部活動の方向性が各学校でも課題になっていることは認識しております。また、校則やルールを主体的に子どもたちに問うていくことについては、校長会や生徒指導の担当者会の中で出ており、子供たちを交えて見直しができるような方向で話し合いが進んでおり、グループウェア等を通して各学校と情報を共有しております。

学校での業務の削減については、リスト化までは進んでいませんが、コロナをきっかけとして、こんな練習はいらなかったとか、こういう行事のやり方や考え方もあるな、といったように、話し合いを重ねつつ今後へ活かしていこうとしています。現在、ウィズコロナの中で、必要なものと必要でないものの選定が進んでいるところです。

【山本委員】 私は、部活動指導のことが気になっております。熱い思いを持っている指導者もいらっしゃるし、子どもの中にも目的を持って頑張りたいという子もいますし、なにか部活動をしないといけないから入っているという子もいます。それぞれの気持ちの調整が難しいと思います。

息子が中学校で野球をしていた時期、早くから帰宅している息子と、今日はノー部活動デーだから部活がないんだという会話をした覚えがあります。働き方改革との兼ね合いもあるとは思いますが、頑張っている子どもたちの気持ちも汲んであげてほしいと思います。また、保護者も部活動を通じて学校の先生と関われる機会にもなっていました。今は、コロナ禍で保護者の関りがどのように変化しているのか気になると

ころです。

私も一般企業で20年ほど働いておりましたが、途中からノー残業デーが始まりました。残業なしで帰れる人、残業しないと仕事が追い付かない人、持ち帰って仕事する人など様々だろうと思います。その辺は、管理職の適切な対応が必要になってくると思いますが、ノー残業デーですべてが解決することはないだろうと思います。しかし、この課題は、時間をかけながらも改善を進めていかなければならないことですので、変わっていこうとしている今、先生方へのフォローが必要なのだろうと思います。

【狩野委員】 教頭以外の超過勤務が少しずつ減ってきているのは、ノー残業デー、一部活動デー、統合型校務支援システムの導入の成果が出てきているのだろうと思います。しかしこの中には、教材研究や学級通信づくりなど、持ち帰りの時間は入っていないということも考慮しなければなりません。また、休憩時間なしで働いている人、休日に自主的に出勤している人といったように見えない残業時間もたくさんあると思います。このような状態が続くことで、子どもの実態を見る余裕がなくなる影響が出てくる恐れがあります。また精神的に苦しむ教師も出てくるでしょう。残業手当もなく4%の調整額で働かせ放題ということにならないようにしなければならぬと思います。

私が勤務していた頃を思い出すと、在校している時間は、人によってだいたい同じくらいだったと思います。早く出勤する先生はいつも早く、遅くまでいる先生はいつも遅い。その人なりのリズムがあるからだと考えられます。ただ、在校等時間が長いから仕事をたくさんしているとはいいきれません。在校等時間が短くても子どもや保護者から信頼されてきっちり仕事をこなしている教員もいました。忙しいと言っている人ほど無駄な時間を使っているということもありました。本当に忙しい人は忙しいと言わずその人に仕事が集まっていたということもありました。忙しくても、今日は何時に退庁するためにこの時間はこの業務を片付けようという計画を立てて仕事をするといった、自らが働き方を変える意識を持つことが必要ではないかと思います。教員は大変な仕事だという言葉が独り歩きして、教員を目指す若者が減り、教員の質が落ちていないかと心配しています。教員の意識を変えていき、忙しいけれど魅力のある仕事だということを発信していく必要があるだろうと思います。

【浅井教育長】 教職員の方々は、子どもたちの成長にかかわる喜びを持つことに生きがいを求めて教師をめざしたと思いますので、それぞれの先生が先生になった理由をいつまでも大事にできる職場づくりが必要だと思っています。

勤務の適正化が課題になっていますが、これについては、超過勤務と業務量の増加について一緒に考えていかなければなりません。一般企業では超過勤務に対価が払われますが、教師はいくら働いても4%の調整額を理由に残業代が払われなかったとい

う制度上の課題があります。制度はそのままなのに、現在の教育現場ではICT化や
いじめ等への対応など、飛躍的に業務量が大きくなってきています。その様な中、勤
務の適正化をどのように進めていくかという課題があります。

勤務の適正化には、基本的には人員の配置が必要ですが、すぐに人員を確保できな
い状況下では様々な課題をひとつひとつ解決していくことになります。超過勤務と業
務量を減らしていくためには、教職員が本来の仕事に打ち込める環境づくりが必要で
す。そのために、南あわじ市では、給食費だけではなく学校徴収金も併せて公会計化
を進めています。また統合型校務支援システムの導入により、システムに蓄積された
データが様々なところに反映され活用されることで、先生の業務量が飛躍的に減って
いくことが期待されています。統合型校務支援システムは、平成30年度に試験導入
し、令和3年度に市内各学校で本格導入しましたが、今後も、日々の活用を通じてよ
り使いやすく改善を行い、業務量の軽減へ繋げていきたいと思えます。

平成30年度と令和3年度で超過勤務時間を比較すると、一般教諭は小学校で月平
均5時間の減、中学校では11時間の減となっています。月平均の超過勤務時間は小
学校で22時間、中学校で26時間となります。現在、中学校部活動が社会体育の方
へ移ろうとしています。まだまだ課題もありますが、地域の先生が部活動の指導を担
うことになれば、机上の計算で1日1時間の部活動超過勤務があるとすると、月20
時間の減となります。部活動を完全に地域に移行することは考えにくいところですが、
地域の人材を活用しながら働き方改革を推進していけたらと思っています。小さな取
組を組み合わせることで教員の勤務時間と業務量を減らしていけたらと思えます。

また、勤務時間の正確な記録を把握することは管理職の基本の仕事であるというこ
とは伝えており、今後もさらに理解を促していきます。

委員から、部活動とは競技スポーツなのか生涯スポーツなのか、方向性が難しいと
いったご意見がありましたが、中体連の方針では、部活動は子どもたちの成長のため
にあるものであり、競技スポーツではないということは明確になっております。ただ、
子どもたちの強くなりたい、勝ちたいという思いもあるため、部活動の方向性につ
いては指導者と生徒と一緒に考えていくことが望ましいと考えております。

学校間における超過勤務の削減に関しては、それぞれの学校の取組は公表されてお
りますので、情報共有はかなり進んでいると考えております。

【守本市長】 本来は、ノー残業デーなどにより、時間を制限すること自体がおかしい
ことだと思えますが、みんなで残業をなくそうという意識を持つことによって本当に
重要な仕事とそうでない仕事を分けていくという効果はあると思えます。

部活動もほとんどの社会体育も、本当に上達をするというところの的を絞って活動
しているわけではないでしょう。もし本格的に行うのであれば、科学的な根拠に基づ
いたトレーニングを考えていかなければならないということになります。これまでの

部活動は、社会人になったら自分に降りかかってくる様々な理不尽にも耐えうるトレーニングの場になっていた部分が相当あると思いますが、この考え方は、これからの世の中、子どもの成長にはつながらないと思います。意識の持ち方をどこまで変えて行けるのが重要だと思います。

(2) 学ぶ楽しさ支援センターについて

【守本市長】 続きまして協議事項(2)の学ぶ楽しさ支援センターについて、議題といたします。まず事務局の説明をお願いします。

【上原次長補兼学校教育課長】 現状を踏まえた課題としましては、1つ目の課題として、義務教育を終えた高校生の進学や就職先の把握ができていないことです。各中学校では進学について本人や家族との面談を繰り返して慎重に決めておりますが、普通科の高校を選び入学したものの、不登校が再発した、出席日数が足りなくなった、通信制高校への転校を余儀なくされたという事例などもあります。また、長期不登校になっている生徒は、高校へ通うことを最初からあきらめ、通信制高校へ進学した事例も多くあります。そしてそのまま連絡が途絶え、その後の進路を学校では把握していないという現状があります。2つ目の課題として、地域と連携して社会参加を意識した学びの場が実現されにくい現状があります。3つ目の課題として、学校の小規模化によりひとりあたりの校務分掌が多くなる中、働き方改革による勤務時間の縮減により、個人の専門性を伸ばす研修が不十分となり、教職員の働きがいを促進し、やりたい研修を十分にできる環境にないという現状があります。4つ目の課題として、南海トラフ地震を見据え、主体性を大事にした防災教育の推進です。

そこで、学ぶ楽しさ支援センターにおいて、4つの課題を解決するために取り組むこととしました。「学ぶ楽しさ支援センター運営の方向」の資料をご覧ください。前回お示したイメージ図より、「地域との連携協働」を下段に示した点を大きく変更しております。このイメージ図は協議検討を重ね、今後も修正していくものと考えています。

イメージ図では、「社会的自立支援」「教職員自主研究支援」「防災教育サテライト校」を支援センターで実施し、これらの事業が「地域との連携協働」によりさらに進めていくことを示しております。具体的な取り組み内容としては、センターの方針づくりとして準備会を開催し、庁内はもとより、地域、NPO法人等と連携し、個別最適な学びの実現について協議を重ねています。そして、実践づくりとしては、既存の実践を体系的に整え、体制づくりの強化を図っていきます。現時点ですでに3つの実践が始まっております。まず、社会的自立支援については、福祉課、健康課、社会福祉協

議会、NPO法人とで不登校・引きこもりネットワーク会議を立ち上げており、情報共有を図りながらさらに体制を整えていく予定です。教職員の自主研究グループ支援体制づくりについては、運営委員会を立ち上げる予定であり、よりよい研修体制を整えていきます。防災教育サテライト校の開設に向けては、防災研修及び防災ジュニアリーダー事業を展開しながら実行委員会を設立していきます。実行委員会では大学生、高校生、小中学校ジュニアリーダー等に参加いただき、令和5年8月21日から23日にセンター開設記念防災教育フォーラムの実施を予定しております。

大学連携の新しい取り組みとしましては、資料として「兵庫教育大学教員養成フラッグシップ構想」を添付しています。協力機関6機関の中に本市も入っており、今年度は防災教育とコアカリキュラムで大学生を受け入れる予定です。

学ぶ楽しさ支援センターは、学びの場として実践しながら、関わる大人も楽しみ、子どもたちの学びを支える体制づくりを協議検討していくことを目的として活動していきます。

【守本市長】 以上で、説明が終わりました。

各委員から、お考えやご意見等をおうかがいたします。

【狩野委員】 社会的自立支援についてですが、定年退職後、スクールソーシャルワーカーとして3年間携わってきた中で、スクールソーシャルワーカーは学校と福祉をつなぐ役割を果たしているということを学びました。子ども達が学校に在籍している間は、担任やスクールソーシャルワーカー等が家庭訪問をし、実態把握をした上で、福祉へつなげていくことができますが、卒業すると学校との結びつきが切れてしまい、その後の支援が途切れてしまうという課題があります。センターで社会的自立支援ができるようになれば、学校を卒業した後も支援体制が継続されることで救われる子どもがいると思います。

教職員自主研修については、私が新任の頃は、土曜日が半ドンで、午後から先輩と食事をしながら悩みを聞いてもらったり指導方法を教わったものでした。現在はコロナ禍ということもあり、食事をする機会が減っております。また、子どもに向き合う時間がなく、パソコンに向き合っている若い先生が多くなっているのではないかと心配しています。特に新任の先生にとって相互に語り合える場が必要だと思しますので、新しいセンターでは語り合える環境づくり、雰囲気づくりをお願いしたいと思います。また、研修では、有名な先生をお招きするのもいいと思いますが、現場で特技を持った身近な先生が講師となっていただきたいと思えます。その先生方が中心となってやがては市内の小中学校を引っ張っていただけるのではないかと思います。

防災教育サテライト校については、有事に備えて防災教育ができる先生の養成は本当に大切なことだと思えます。防災教育の必要性やノウハウを指導する拠点として実

現していただきたいと思います。

【山本委員】 これからセンターの改修工事が始まっていくと思います。私も現場に何度か行ったことがあります。校門や玄関口が非常に入りにくいので、広げて入りやすくなるようお願いしたいと思います。そして、不登校や進学先に悩んでいる子どもが、誰でも気軽に入れる雰囲気を持った施設になってほしいと思っています。

また、市内では農業や漁業が高齢化して従事者が減少しているという現状がありますが、そのような場に不登校等で悩むの生徒が社会体験できる場として紹介できたらいいのではないかと思います。

地域交流についてですが、高齢者ががんばっていることを若者も一緒に活動できるような取組があれば高齢者も喜ぶのではないかと思います。

教職員の自主研究についてですが、狩野委員がおっしゃったように、講師として例えば一般企業にお勤めの身近な方をお招きし、経験や失敗談等を聞く機会は、距離感が近く、いい刺激になるのではないかと思います。

【青木委員】 とても期待している施設だということが私の一番の気持ちです。センターの機能として4つの柱を立てていますが、この4つのことを一度に実践するには大変だと思っています。もし、1本の柱をドーンと立てて4つがつながれるとしたら防災教育じゃないかと思います。

例えば防災教育についてのワークショップに、不登校の子どもさんへ参加しませんかとお誘いをするというように、集まりやすいコンテンツとして防災教育を活用することができないかと思っています。そこに学校の先生が講師としてやってくる、地域の人も集まってくる、というようなことが自然に起きるようなデザインができたらと思います。これにはコーディネーターが重要なポジションになってくるので、コーディネーターの方は大変な役割を担うことになるだろうと思います。

狩野委員のおっしゃったように、私も、先輩後輩が気軽に話をできることが重要だと思っています。教職員のやる気のある方は、センターがなくても自主的に活動されている人もいますが、センターへ行けば気軽な気持ちで、情報交換ができたり、〇〇先生と話ができるということが実現できればと思いました。

根本的なことですが、「学ぶ楽しさ支援センター運営の方向性」の図の中で、「南あわじ市の全ての子どもたち」「なりたい自分になれる子どもに」とありますが、ここは「子ども」ではなく「人」がいいんじゃないかと思うのです。

【大本学ぶ楽しさ支援センター開設準備職員】 これは、南あわじの未来を担う、南あわじ市で育って大人になっていく子どもという意味で書かせていただきました。幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校・大学、それぞれのその状況に応じて支援してい

くというイメージです。

【青木委員】 イメージはとてもよくわかります。ただ、「子ども」と書くと子どもの施設だと思われてしまうのもったいないと思いました。

今、NHKで、退職した方や子育てが終わった方が自分に何も残らないという虚無感に苛まれているというテーマのドラマが放送されていますが、そういう気持ちを持つ方々がセンターに来て、防災などの話を聞く場になってもいいのではないかと感じました。

「防災教育」という言葉が固い、難しい、与えられるもの、という印象を私たち世代は持っている気がしております、何か他にキャッチーに代える方法はないでしょうか。例えば洲本市でずっと続けているイベントが、「AWAJISHIMA Soda t e t e M a r k e t」という名前で全国から注目を浴び、島外からも来てくれるんですね。でもここにあるように「センター開設記念防災教育フォーラム」に何もときめかないんですね。おもしろそうな感じが一切しない。行こうという気にならない。行こうという気になるフレーズが何なのかわからないのですが、何かいいフレーズがあるといいと思いました。

また、前回、センターの階段の壁面に地元の方がデザインされるという話をお聞きしましたが、地元の子どもたちや他のみなさんが参画できるとより楽しいのではないかと思います。

【數田委員】 「学ぶ楽しさ支援センター運営の方向性」のイメージ図のなかで、センターの役割として「学校教育の充実とそれにはまらない」という言葉が少し引っかかりましたのでご検討をお願いします。

私も、このような施設ができたらいいとずっと期待していました。活用が進むことによってどんどん変わってくると思いますし、学校以外で支援する機関ができることを本当にうれしく思っています。

教師時代、出席日数が足りなかったり成績が下がったりで高校を途中で去ってしまった生徒がおりました。当時は、なぜだろう、と理解できず疑問のままで終わってしまいました。退職後も、自分のし残した最大のことだという気持ちが消えず、引きこもりや不登校を支援するNPOを立ち上げ、相談窓口を開設しました。相談を受ける中で、思いのほか問題を抱えている人は多く、原因も多岐にわたると実感しました。その人たちの現状を踏まえて、市や社協とネットワーク会議を持つことによって、一歩を踏み出せる人も増えてきており、いい流れができています。行政がバックアップしながら進められる場があることは本当に素晴らしいことですのでどんどん進めていっていただきたいと思います。

開設しているNPOにもカウンセリングの専門家が入っており、相談数も増えてい

ますが、悩んでいる人たちが仕事を見つけて楽しく住めるような南あわじ市であってほしいと願っています。

前から何度か発言しておりますが、「学ぶ楽しさ日本一」が市民の方に本当に伝わっているのか、現場の先生方に本当に理解してもらっているかといつも思っています。それには、先生方が自分の教育に自信を持ち、楽しいと思いながら授業をできているか、というところだと思います。授業を参観させていただくと、教科を本当に好きで楽しく授業をする先生の授業は子どもたちも目を輝かせて聞いています。自分の教科の専門性に誇りをもって授業する先生が増えてほしいと願っています。

また、センターが、素晴らしい授業をしている先生の授業を学びあえる場になればと思います。現状では同僚の中で立派な授業をしている人の授業を学ぶチャンスがなかなかないと思いますのでそこを切り開いてほしいです。素晴らしい授業の様子をビデオで見られるようにするなど、教員の資質向上の機会を広げてほしいとも思います。

地域協働としては、地域や高齢者の人材活用が必要だと思います。核家族化が進む社会では、高齢者の方に接するだけでも意味があると思います。高齢者には足や腰の痛い人もいるんだな、とか中学校や高校の時の話や経験をじかに聞く機会としても活用できないでしょうか。様々な世代の交流の場としても活用していただきたいと思います。

防災教育の成果はだんだん出ていると感じています。子どもの地震に対する意識が以前と比べてずいぶん変わってきていると思いますので、防災がさらにもっと身近になるよう進めてほしいと思います。

【近藤委員】 私もセンターには期待しています。多くの方の思いが期待しているという言葉に込められていると感じています。

特に期待したいのは、不登校のところ です。市内の4か所の適応教室は熱心に活動されていて敬意を表したいところです。しかし適応教室だけでは制度上カバーできないところもありますので、社会自立に向けた学びの場としてセンターが活躍できればと期待しています。

次に、教職員の働きがいの充実ですが、教員同士で語り合える場は必要だと思います。私も教師時代を振り返りますと、当時、南淡中学校ができた時に私が担当していた理科には5人、技術には3人の教師がいました。その時は先輩の授業を見てOJTにより学んできました。しかし、現在は児童生徒数が減少し、校内に同じ教科の先生がいることが少なくなり、校内で学ぶ機会が減ってきました。それならば、学校の枠を超えて教師が学ぶ楽しさを感じる拠点として充実してほしいと思います。

先日、某図書館の新刊の書架に「ギガスクール構想取組事例ガイドブック」という本を見つけました。2022年2月発刊の新しい本です。取り組み事例がエピソード編と理論編に分けてまとめられていました。本を読みながら、私だったらこんなこと

やってみたいな、このグループの方と語り合えたらいいな、など様々な思いを持ちましたが、センターがこういう取組事例のガイドブックみたいな働きを今後していけたらいいのではないかと感じました。自分の職場を離れても語り合える場が存在するということはすばらしいことです。職員の働きがいと働きやすさは相反するものではないし、働き方改革の大きな柱につながっていくのではないかと思います。センターの準備会でこれから議論が本格化すると思いますが大いに期待しております。

【浅井教育長】 センターの機能として4つの要素を上げていますが、この4つは完全な状態でスタートするものではなく、具体的な内容についてはこれからいろいろ議論していく予定ですので、センター自体が開設とともにどんどん成長していくというイメージを持っています。

大きな市の教育センターのようなことはできませんので、南あわじ市らしい教育センターとして特色を持たせようとしています。私自身、学校経営で実践してきたことは今ある長所を徹底的に伸ばすということです。そういう思いで教育センターも進めていきたいと思っています。

また、教員の自主研修を根本的に変えていく必要があると思っています。強制的に受けさせられる受け身の研修は無駄が多く身につかない部分もあります。興味のあるところ、温度が高いところに、さらに温度を高くすることで、その熱を周りに広げてもらうやり方がいいのではないかと考えています。また、自主研修が行われやすい環境整備としては、放課後、学校から出やすい雰囲気構築すること、活動に対する管理職の支援の仕方、経費補助が考えられます。経費の補助については、グループごとに補助金を支給して自主研修に活用してもらうというやり方もできると思います。センター開設時には2つほどのグループから始めることになると思いますが、徐々にグループ活動が増え、成長してほしいと思っています。

防災教育については、現在、3教育大学と具体的に進めていく方法を議論しています。兵庫教育大学とはフラッグシップとして今年度より協力市として関わることになります。鳴門教育大学とは包括的な連携協定の中でも防災教育に視点を置いた連携を行っていきます。宮城教育大学とは防災教育に焦点を当てた連携を行います。防災教育には知識や理論の部分と実践の部分がありますが、そのどちらも取り組んでいくことになります。南あわじ市では、毎年夏休み期間中に防災ジュニアリーダーが東北を訪問していますが、これに大学生にも参加してもらい、一緒に体験を積み重ねてもらう方向で進めています。また、令和5年に予定しているセンター開設記念防災教育フォーラムには、大学生を交えて実行委員会を立ち上げ、企画、立案、実施まで運営してもらう予定です。フォーラムの内容は、小中学生それぞれで議論し、市長に提言を行う、ということを考えています。理論と実践を組み合わせた宮城教育大学の防災教育サテライト校の構想もあります。

社会的自立支援については、市だけでなく様々な機関と連携するしくみづくりをこれから議論していきたいと思います。支援センターのできる三原志知地区は、学校と地域が密接につながっている地域であるということも大切にしながら先進的な取り組みも踏まえて議論していきたいと思います。

【守本市長】 教職員自主研修支援について言いますと、現状では担任がクラスの児童生徒に教えるというスタイルですが、今後は、おもしろい授業ができる先生の授業がICT化によりほかの学校でも受けることができるようになっていくのではないかと思います。そうすると先生は授業の技術を磨かざるをえない状況になり、教員の資質向上につながっていくということになるのだろうと思います。

(3) 社会教育の課題及び方向性について

【守本市長】 続きまして、協議事項(3)社会教育の課題及び方向性について、を議題といたします。事務局の説明をお願いします。

【阿萬野社会教育課長】 まず、社会教育とは、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動であると社会教育法で定義されています。つまり、青少年教育から高齢者教育までと年齢層も広く、内容についても家庭教育から社会奉仕、防災、人権、体育、レクリエーション活動まで幅広く、課題を挙げるときりがないというのが実情です。

令和3年度に社会教育委員で課題の洗い出しを行い、「組織体制」「社会教育施設」「社会教育施策」の3項目に区分し整理を行いました。その結果を別紙資料1にまとめています。組織体制として5項目、社会教育施設として8項目、社会教育施策に至っては17項目が挙げられております。

社会教育の課題として、社会教育委員が特に熱心に議論されていた部分が2点ありました。1点目は組織体制や地域との関わり方について、2点目は社会教育施設、特に公民館関係でした。

このように洗い出された課題については、教育委員会と方向性を合わせる必要があるということから、教育長との意見交換を行う目的で今年3月に懇談会を開催しました。その時の会議で出された意見や委員の生の声を知っていただきたいと思い、会議録を資料として添付させていただいております。

その際の主な意見としましては、社会教育主事等の専門的な知識を持った職員の配置や、情報発信を効果的にできるような組織体制を含めた整備について意見が出ました。また、公民館の存在の重要性を認めながらも、住民の意見をどこまで反映し

ているのかという、地域との関わりの部分に関する意見が出ていました。

次に、人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興についてですが、参考資料として、「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」を添付しておりますのでご覧おきください。

社会教育における「学ぶ楽しさ日本一」は、「学ぶ楽しさ」は子どもだけではなく、大人も子どもも学ぶ楽しさ日本一という基本的な考え方に立って、その方向に大人も子どもも向かっていく。そのことがより地域の活性化や充実というところに繋がっていくと考えています。「学ぶ楽しさ」は学びや参加のきっかけづくりを推進し、楽しさをベースとして感心の高い学びや活動のきっかけづくりを工夫し、子どもや若者の探索を促進し、地域とのかかわりの動機付けとなりえる成功体験づくりにつなげることを考えています。

今後の社会教育施設に求められる役割としましては、公民館活動が低調との意見があることに對し、交流センターが併設されたことで、人づくり、つながりづくり、地域づくりと、これまでよりも幅広く住民からの意見を取り入れたうえで、地域づくり事業と連携して事業を行えるようになったことで活動の幅が広がったと考えております。ただ、地域格差が大きく、積極的に取り組む地区と、そうでない地区との差が大きいことも事実です。公民館活動を一覧表にまとめておりますので、別紙資料3をご覧ください。住民要望を取り入れて特色のある事業を実施している公民館が多数あります。公民館活動が盛んな館については、周辺の館へも指導的な役割ができるように、公民館同士の連携を図る取り組みも開始しています。今後は人口規模による予算配分ではなく、どんな活動がしたいかということのを査定したうえでの予算配分を行わなければならないと考えます。そのことがより地域の活性化につながると考えます。その意味では中央公民館の指導的役割は、ますます重要になると考えています。単なる公民館活動に留まらずに、今後は地域との連携、自治会との連携を積極的に行い、幅広い年齢層が連携して社会教育の充実につなげていく必要が大きくなっています。公民館以外の社会教育施設についても、地域や他団体との連携を図っていくことができるかということが、鍵になると考えられます。

【守本市長】 以上で、説明が終わりました。

各委員から、お考えやご意見等をおうかがいたします。

【青木委員】 先日、社会教育委員の会議を傍聴させていただきました。委員のみなさんが率直に意見を交わされており、興味深く聞かせていただきました。委員さんは教育長とお話できた点がとても良かったとおっしゃられていたように認識しています。今後も、教育長や市長が会議に出席いただくことによって、委員のみなさんからも様々な意見が出てくるのではないかと思います。

公民館活動もそうですが、モチベーションややる気が出ないといくらやっても意味がないと思いますので、どうしたらモチベーションが出るのかを考えたらいいのかなと思って資料を拝見しました。「公民館主催事業一覧」の資料を見ると、実施回数と予算に整合性が取れていないことに驚きましたし、このことをそれぞれの地区は相互にご存じなのかなと疑問に思いました。

活動への予算配分について、自分でやりたいことを持ち寄って予算をつけて行くというやり方は賛成です。モチベーションが上がり幅広い世代が参加できる活動をお願いしたいと思います。

【守本市長】 「公民館主催事業一覧」の資料ですが、令和3年度実績をここに掲載するのは適当でないと思います。新型コロナウイルス感染症に対するセンシティブティの違いで、ずいぶん活動を自粛された地区もあったと思います。ですので、各地区の活動例とはならないのではないかとこの表を見て感じております。

【阿萬野社会教育課長】 この資料に掲載されている活動の中で、中止になった活動も多いですが、計画段階の活動をできるだけ反映しております。ここには主催事業のみ上げておりますので、自主的なサークル事業等は含まれておりません。

【數田委員】 「教育長との懇談会会議録」を読ませていただきました。社会教育委員のみなさんが、したいことがあるけれどなかなか進められないといったように、いろいろと悩まれ、ご苦労されている様子が感じられました。

参加対象者は青少年から高齢者までと言いつつ、高齢者の参加が多いと思います。高齢者の参加が多いのはいいことですが、異種年齢の交流をひとつの目的にするならば、活動時間や内容の工夫も必要だと感じました。また、子育てで悩んでいる保護者は、個人的にグループで場所を借りて交流しているのだと思いますが、そういう人たちが気軽に出会い、情報交換し、学び合い、交流できる場所ができないだろうかと感じました。広報活動の工夫が必要になってくると思いますが、子どもたちも高齢者と参加して交流する場になればと思います。

【近藤委員】 私も「教育長との懇談会会議録」を読ませていただき、社会教育の課題やそれぞれにご苦労されていることなどを知ることができ、大変勉強になりました。また、人生100年時代といわれ、生涯教育の幅広いニーズに対応するには課題が多いと実感しました。

中教審の資料として、「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」がありますが、その中で、「推進の方策」として、「学びの活動をコーディネートする人材の育成・活用」とあります。コーディネーターを発掘したり育成したりとい

うところが肝心なところだと思います。これからに期待したいと思います。

令和3年度に社会教育委員が議論された意見をまとめた資料の中で、「遊歩道、登山道の整備」に目が留まり、私なりにいろいろイメージを膨らませました。家の近所に河川が流れており、年に数回、河川清掃をしますが、数か月すると元の草むらになってしまい、非常にもったいないと思っています。こういう場所に、ジョギングコース、サイクリングコースが整備されることにより、車を運転しなくなった高齢者にも活用していただけるのではないかと思います。

【狩野委員】 私も「教育長との懇談会会議録」の資料は非常に参考になりました。会議録を読んだ後、広田地区公民館へ行き、館長さんとお話してきました。館長さんのお話のなかで、学校あつての公民館とおっしゃっていたのが心に残っています。広田地区公民館には、洲本市民も参加しているとお聞きし、開かれた公民館活動をしていると感じました。広田小中学校は組合立でありますので、広田地区公民館も組合立のような考えを持っていただきたいと思いました。

要望として、公民館に就学前の子どもたちが集まれるキッズスペースがありますが、そこが保護者も気軽に交流できる場になればいいと思います。また、公民館ごとにテーマを決めて行事の洗い直しをして時代にマッチした行事を取り入れていけば活性化するのでないかと思います。

【山本委員】 私は、広田地区の地域まちづくり協議会に関わっておりますので、公民館へ行く機会がよくあります。コロナ前は老人会や音楽発表会などの行事が多くありましたが、ここ2年はコロナ禍により、中止となる事業が相次ぎました。

地域には公民館での活動の運営に携わってくれる人、活動に参加したい人がいると思いますが、コロナ禍で活動の機会が減り、寂しい思いをしている人もいますので、地域住民が活動できる環境を広げてほしいと思います。

また、中教審の資料の中で、『「命を守る」生涯学習・社会教育』とあります。私は現在、消防団で第一方面隊の選任分団長をやっており、年一回、防災訓練で小学校を使わせてもらっています。そこで、地元の子どもたちにもっと消防団活動のことを知ってほしいと思っています。消防団活動をしているのは子どもの保護者世代が多いと思いますが、災害時に自分の命を守ったり、助けてもらったり、そういうことを知る機会や教育の場として、声をかけていただけたら消防団として力になりたいと思っています。

【浅井教育長】 社会教育委員との懇談会の中で指摘されたのは大きく2つです。1つ目は公民館活動が低調であることに対し、活性化への道及び専門性を持った職員の配置ということです。2点目は、予算の増額です。私からは、公民館活動の低調につい

では、「学ぶ楽しさ日本一」と同じ方向を向いて取り組んでほしいということと、毎年同じことの繰り返しでは低調になるのは当たり前ですから、新しい活動や他の団体や公民館等との連携に力を入れていきたいということ、そして連携を進めるために、子どもたちを巻き込んだ活動を考えていく必要があるということをお話ししました。

また、地域の方の中には、専門的な知識を持ったかたがたくさんいらっしゃると思いますので、そのような人材を活用していただきたいと思っております。予算については、学校のスクールチャレンジ事業のように、活動の内容を見て予算を配分するという方法を取っていきたいという話をさせていただきました。

【守本市長】 お話を聞いていると、教育委員会からの視点と市長部局の視点が違うのではないかと感じました。みなさんは公民館活動という視点で社会教育活動を見ておられるように思います。市長部局から見ると、たとえば、子育てに関して言えば、子育て支援センターの活動のひとつとして地区公民館へ出張して取り組んでいるものもあります。しかし、公民館主催事業でないということで、公民館活動にはカウントされていませんでした。主催事業以外にも自主的なサークル活動もありますし、消防としての取組など公民館を活動の場としている事業は多いと思います。社会教育的な場は大変広い範囲になると思いますが、公民館事業だけ見ていいのだろうかと感じております。本当に社会教育を論じるのであれば、地域で実際に行われている活動を把握しないと、低調や活発ということは言いづらいのではないかとということが率直な印象です。

重要なことは、公民館事業としてやるかやらないかではなく、いかに住民が参加して学ぶ場を作っていくかだと思いますので、そこに軸足を置いていただきたいと感じました。

【守本市長】 以上で、3つの議題についてご協議いただきましたが、2つ目の議題で、山本委員が学ぶ楽しさ支援センターの校門のあたりを広げて入りやすくしてはというご意見がありました。現在のところはどのように進んでおりますか。

【浅井教育長】 入りやすくするためにどうしたらいいかという議論はしております。不登校の子ども達も入りやすくするために、建物の1階から3階までの階段の壁面に夢のある絵を描くことを検討しています。また遊具の設置等も検討しておりますので、玄関の部分も環境整備の一環としてこれから検討していきたいと思っております。

【上原次長補兼学校教育課長】 第一期工事で、校門あたりの植栽を一部撤去して見通しをよくする予定になっております。

4 閉 会

本日は、幅広くご意見をいただきありがとうございました。ご意見を参考にさせていただきます今後進めてまいりたいと思います。

これをもちまして、令和4年度第1回総合教育会議を閉会いたします。

午後0時09分